

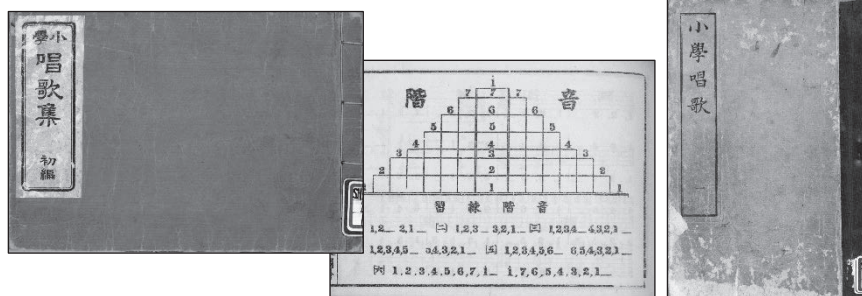
しょうがくしょうかしゅう

＃1 小學唱歌集 初編～第3編

編纂：文部省音楽取調掛（もんぶしょうおんがくとりしらべがかり）

刊行：初編(四版)明治22年(1889)

第2、3編(再版)明治18年(1885)



※左より、『小学唱歌集 初編』、「音階」、『小學唱歌 卷之一』

♪ 解題

■ 内容

音楽教育を調査、研究するため文部省内に設置された機関、「音楽取調掛」が編集した日本で最初の音楽教科書。各編の初版は明治15年(1882)から明治17年(1884)にかけて、年1編ずつ3編が刊行された。初編33曲、第二編16曲、第三編42曲の全91曲で構成される。「蝶々」「みわたせば(むすんでひらいて)」「蛍(蛍の光)」「仰げば尊し」など、今も歌い継がれ、親しみのある曲が含まれている。掲載された曲の大半は、外国の歌の旋律に日本語の歌詞をつけたものである。

曲の選定は、お雇い外国人として、アメリカから招聘した音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メーソンと、そのメーソンから留学中に音楽を学び、音楽取調掛で初代の掛長となった伊沢修二がその中心を担った。候補となっ

た曲をメーソンが、東京師範学校や東京女子師範学校の授業で生徒に歌わせ、教材として適当かどうかの検討も行った。

歌詞は、記紀、万葉をはじめとした歌集、漢詩、故事などを題材としたものが多い。語法や韻、実際に歌う子どもたちの心情などを巡り議論があり、修正が重ねられた。また、初編の「緒言」にあるとおり、「徳性ノ涵養」「人心ヲ正シ風化ヲ助クル」ことが唱歌教育の目的とされたため、道徳に沿った内容に改められる歌詞も増えていった。こうした経過から完成が遅れ、初編の奥付に書かれている出版届は「明治14年11月」となっているが、実際に刊行されたのは明治15年4月である。B6版程度の横長の和綴本で、初編、第二編は3千部、第三編は2千部が刊行された。

掲載曲の旋律は、曲順が進むにつれて音域が広がるとともに、単旋律から合唱、輪唱と高度な曲が増えるなど、順序だてて学ぶ構成となっている。初編の冒頭に「音階」と示された図が示され、1オクターブを、1、2、3・・・7と数字譜で表記している。この唱歌集に説明は書かれてないが、数字は階名を表し、ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナと読む。ドレミ唱法が広まる明治20年代後半までは、このヒフミ唱法で歌唱の練習が行われた。

音楽取調掛は当初、これらの曲の「掛図」（黒板や壁面に吊るす掛け軸のような教材）だけを作成する予定だったが、後に児童各々に行き渡らせることを企図し、同じ内容の冊子体として、この『小学唱歌集 初編～第3編』が編集された。

なお、後に伊沢が編集し、明治25年(1892)から翌年にかけて刊行した『小学唱歌』は、このとき伊沢が文部省を辞していたため、検定を受けて教科書となったものである。1、2巻が尋常小学校、3、4巻が高等小学の女生徒、5、6巻が高等小学の男子生徒というように、児童の対象別に巻が分けられている。また、これまで卑俗なものとして「唱歌」から除かれていたわらべ歌が含まれていることに特徴がある。

■ 作者

ここでは、音楽取調掛設立に関わった伊沢修二の経歴とあわせて紹介する。人物コラム1 (p.7) も参照のこと。

伊沢は、信濃国から上京、大学南校で学んだ後、明治5年（1872）文部省に出仕。愛知師範学校校長を経て、明治8年（1875）、師範教育調査の目的でアメリカに留学した。愛知師範学校時代には、付属の幼稚園で遊戯と結び付けた唱歌を試みるなど音楽教育に関心を持ち、ボストン滞在中に、後述するメーソンの教材も参考にしながら、後の『小学唱歌集』の雛形にもなる唱歌掛図の作成に取りかかった。

そして、帰国直前の明治11年（1878）4月、留学生監督官であり、同じく日本の音楽教育の行く末に関心をもつ目賀田種太郎と連名で、文部大輔田中不二麿あてに上申書を提出した。すでに明治5年には「学制」公布により、制度上「唱歌」は小学校の教科となっていたが、実際には行われなかった。そこで、この上申書では、音楽が児童や社会に及ぼす機能を挙げ、「唱歌」を確立するための音楽をおこすべく、その教材である掛図を作成している、といった状況を報告している。

次いで、帰国後の明治11年6月に、上申書でも触れていた唱歌掛図とその解説「唱歌法取調書—メーソン方式の掛図つき—」を提出。文部省は、明治12年（1879）3月に「音楽伝習所設置案」を起草したが、「節儉ヲ主トシテ着手スベシ」といった但し書きがつき、10月に、「音楽取調掛」として設置された。

伊沢はその掛長に任命され、文部卿寺島宗則に「音楽取調ニ付見込書」を提出した。この見込書には、音楽取調の事業として、①東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲を作ること、②将来国楽を興すべき人物を養成すること、③諸学校に音楽を実施することの3つを挙げている。

音楽取調掛は、この方針に従い唱歌の普及を進めていくが、取調とあるように、国内外の音律の研究、楽器の試作、俗曲（三味線声曲など）の改良といった、様々な試みを行っている。その内容は、伊沢修二編著『音楽取調成績申報書』（1884）にみることができる。そして、明治20年（1887）には、東京音楽学校に改組され、戦後の学制改革の結果、東京藝術大学音楽学部となった。

■ 原曲の所在

曲ごとの作詞・作曲者名が『小学唱歌集初編～第3編』には書かれていない。歌詞は、石原和三郎編『小学唱歌集註解』や旗野士良編『小学唱歌集評釈』といった注釈書があり、その典拠や意味などを知ることができる。しかし、歌の旋律に関しては残された記録が少ない。最初のまとまった調査は、遠藤宏著『明治音楽史考』で、これは伊沢が書いた唱歌の演奏会プログラムの解説などを元に、91曲中の45曲の出自を紹介したものである。また、『音楽教育成立への軌跡』は、メーソンが本国で編集していた教材「ナショナル・ミュージック・チャート」と「ナショナル・ミュージック・リーダー」に『小学唱歌集』の曲がかなり含まれていることを明らかにしている。

平成23年(2011)、『小学唱歌集 第3編』掲載の「仰げば尊し」について、原曲が収録されていた歌集を櫻井雅人(一橋大名誉教授)が発見した。その後、インターネット上で世界各国の多くの歌集の調査が可能になったことも背景に、櫻井を含めた3人の共同研究により、その他不明だった曲の調査が進められる。その結果、全91曲の元歌、原曲の系譜を明らかにし、『仰げば尊し：幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』にまとめられた。

♪ 類似の唱歌集

- ・『小学唱歌集 初編～第3編』文部省音楽取調掛編 高等師範学校附属音楽学校 1885 [SH375.97/28]
- ・『小学唱歌』卷之1～卷之5 伊沢修二編 大日本圖書 1892 [SH375.97/33/1～5]

♪ 参考文献

- ・『小学唱歌集註解』石原和三郎編 普及舎 1896
※当館未所蔵 国立国会図書館デジタルコレクション(インターネット公開)で閲覧可
- ・『小学唱歌集評釈』旗士良著 同文館 1906 [SH375.7/63]
- ・『明治音楽史考』遠藤宏著 有朋堂 1948 [N0-1509]
- ・『唱歌教育成立過程の研究』山住正巳著 東京大学出版会 1967 [N0-1411]
- ・『洋楽事始：音楽取調申報書』伊沢修二編 平凡社 1971 (東洋文庫 188)

[375.7/101]

・『音楽教育成立への軌跡』東京芸術大学音楽取調掛研究班編 音楽之友社
1976 [375.7/120]

・『子どもの歌を語る』山住正己著 岩波書店 1994 [767.7/207]

・斉藤利彦校注「小学唱歌集」（『新日本古典文学大系 明治編 11』中野三
敏ほか編 岩波書店 2006）[918/20-3/11]

・『仰げば尊し：幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』櫻井雅人ほか著
東京堂出版 2015 [767.7/245]